

日本ジオパークにおける「ジオパーク」概念の再構築の必要性：レスボス集中研修での文脈から

Necessity in re-assemblage of Japanese geopark concept: a lesson from the context of the Lesvos international intensive course on geoparks

*朝日 克彦¹、柴 ひかり²、新名 阿津子³

*Katsuhiko Asahi¹, Hikari Shiba², Atsuko Niina³

1. 伊豆半島ジオパーク推進協議会、2. 桜島・錦江湾ジオパーク推進協議会、3. 公立鳥取環境大学

1. Izu Peninsula Geopark Promotion Council, 2. Sakurajima-Kinkowan Geopark Promotion Council Office, 3. Tottori University of Environmental Studies

演者らはレスボス島世界ジオパークで開催される「ジオパーク国際集中研修」に参加し、ユネスコ/GGNが考えるジオパーク像について、GGN執行幹部らによる講演を受講、議論を重ね、改めてそのコンセプトを体得してきた。そこで語られたことを要約すると、ユネスコ世界ジオパークに求められることがらとは、ジオパークの三本柱、すなわち保護・保全、教育、持続可能な開発であり、そのためには生態系や無形文化遺産との連携・融合の実践が必要である。これらの活動を通して地域の持続可能な開発を図るのがジオパークである。ユネスコ世界ジオパークの先進地とされるレスボス島ユネスコ世界ジオパークにおける実践とは、女性の参画であり、地場産品の販売奨励であり、地域住民の参画である。すなわち、地域の「持続可能な開発」が目的であるから、これらの実践例には「ジオ」との直接的な関連性は一義的には問われず、「ジオロジー」だけでなく「ジオストーリー」へのこだわりや縛りはない。

こうしたユネスコ/GGNのねらいは発展途上地域にこそかみ合う概念であり、先進国たるわが国にそのまま適用できるものではない。とはいっても、「ジオストーリー」を重視したわが国のジオパークの実践は、ユネスコ/GGNの理念と乖離しつつあり、今一度、理念を咀嚼する必要があると考える。またわが国のジオパークでは交流人口の拡大を目指したジオパーク開発が目的となっているが、この点もユネスコ/GGNの理念と齟齬がある。ユネスコ世界ジオパークはその認定にあたって、自己評価表によってユネスコ/GGNが描くジオパーク像に縛られる。日本ジオパークもこれにならった自己評価表を導入している以上、ジオパークの目的である地域の「持続可能な開発」へ再構築する必要がある。

キーワード：ユネスコ世界ジオパーク、世界ジオパークネットワーク、持続可能な開発、ジオパーク国際集中研修、概念再構築

Keywords: UNESCO global geopark, Global geopark network, Sustainable development, International intensive course on geoparks, Concept re-assemblage